

高校生の進路選択から見た保育者養成の高学歴化の背景

大学経営・政策コース 両角 亜希子

Increase in the number of high school students pursuing higher education to become early childhood teachers

Akiko MOROZUMI

Early childhood teachers' education was formerly provided by junior colleges; however, in recent years, there has been an increase in the number of universities providing courses on child care. Thus, high school students aspiring to become early childhood teachers now have more courses to choose from. But, how do they choose the appropriate course? Furthermore, why has there been an increase in the number of high school students pursuing higher education to become early childhood teachers?

To address these questions, I analyzed data from the National High School Student Survey. The major findings of this study were as follows. First, the number of male students interested in becoming early childhood teachers is increasing. Second, the number of high school students who want to pursue this career and who would like to find jobs in this field while pursuing university education is increasing.

目次

1. はじめに—四大化が進む保育者養成
2. 先行研究の検討と本稿の分析課題
 - 2.1 先行研究のレビュー
 - 2.2 分析課題とデータ
3. 分析結果
 - 3.1 男女別の傾向
 - 3.2 女子の進路希望を分ける要因
4. 結論と今後の課題

1. はじめに—四大化が進む保育者養成

戦後、高等教育進学率、とくに大学進学率は上昇してきた。18歳人口は減少しているにもかかわらず、大学の設置は進んできた。その中には、短大から四年制大学へ転換したケースも多い。こうした機関の行動、高校生の行動の変化については、非常に多くの研究がおこなわれてきたが、現実は何が起きているのかを理解し、今後どのようになっていくのかを考えていくためには、全体動向だけでなく、ある分野に着目して詳しく検討してみることもまた必要ではないかと考えていた。

本稿で注目したのは、保育者養成の例である。保育者とは、幼稚園教師と保育士のことを指すが、図表1には、厚生労働省の指定を受けた保育士養成校の新設数の時系列変化を示した。保育士養成校であるが、幼

稚園教師の免許もあわせて取得できる学校が多い。これをみると、1960—70年代に、短大で多くの養成校が設置されたこと、2000年以降に四大で養成校の設置がかつてない勢いで進んできたことが確認できる。図表2には、現在の養成校の機関数と該当学科の入学定員の合計値を示した。機関数でも、入学定員で見ても、大学の割合がきわめて高くなっていることが分かる。つまり、保育者養成も、四大進学化、つまり高学歴化がおきた1つの典型例といえる。そうした保育者養成の高学歴化がなぜ、どのように起きてきたのかを、高校生の進路選択という観点から考えてみるのが本稿の研究関心である。

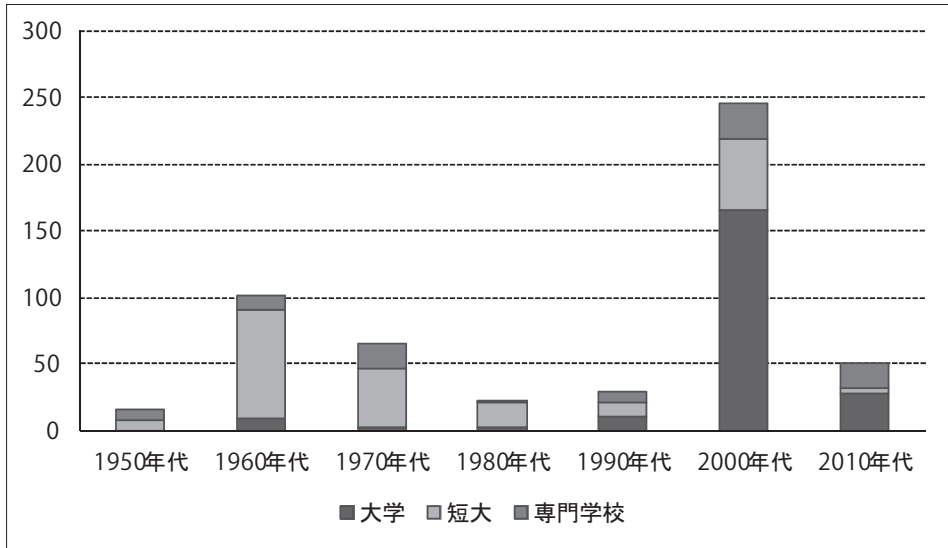
2. 先行研究の検討と本稿の分析課題

2.1 先行研究のレビュー

ここでは高卒時の女子の進路選択、保育士養成の四大化の2つの観点から、先行研究をレビューしておく。あらためて言うまでもないが、保育者は女子にのみ開かれた職業ではないものの、保育者の9割以上が女性であることを考慮すると、女子の進路選択という観点は考慮せざるを得ないからである。

女子の高等教育進学率の推移を図表3に示した。1970年代から90年代に需要が集中してきたのは短大で次いで大学、専門学校（「短大→大学→専門学校」と表記、以下同様）、90年代以降に「大学→短大→専

図表 1 機関種類別の保育士養成校の新設数



(注) 全国保育士養成協議会のウェブサイトより筆者作成。平成27年4月1日時点で現存している養成校のみを記載。養成校指定日で算出。機関数でなく、指定をとった単位(学科・コース等)の数を算出。

図表 2 現在の保育士養成の指定機関数と入学定員

	指定機関数	該当学科(コース)の入学定員合計
大学	221	22623
短大	218	25265
専門学校	103	7397
合計	542	55285

(注) 入学定員は全国大学一覧、全国短大・専門学校一覧より算出。

修学校」, 2000年は「大学→専修学校→短大」と大きく急速に変化してきた。濱中(2013)は, 女子の場合は, 正規社員になるか, 非正規社員になるか, 結婚するかによって, 経済的効用が異なることを指摘している。とくに結婚による影響であるが, そうした将来の選択肢の多さやその不確実性などが女子の進路選択の研究をするうえで, 男子以上の複雑さを持っており, 女子の進路選択に関する研究は, 男子を対象とした研究に比べると少ない。女子の大学進学率については, 近年伸びてきたものの, 依然として男子と比べて少ないのはなぜかという観点からいくつかの実証研究がなされている。図表4には進学率の男女差の時系列推移を示した。男女の進学格差はかつてよりは小さくなったものの, その差はなかなか埋まらないからである。藤村(2011)は, 女子の場合は同じ学力でも所得や兄弟数によって大学に進学するかどうかが大きく左右されていることについて, 家庭内の資源配分という観点に着目し, 親が希少な資源をジェンダーと生順の2つの基準で選択的に配分していること, さらにローン

は回避しようという親の愛情が, 女子の進学率の低さに影響をもたらしていると指摘している。また, 大学進学率の地域間格差に着目した朴澤(2016)は, 便益と費用の観点から分析して, 女子の大学進学率の高低は, 将来の便益との関係から説明できることを明らかにしている。以上は, 大学進学に関心の中心がある先行研究であるが, 長尾(2008)は専門学校に着目し, 誰が進学してきたのかの時系列変化を分析している。男女ともに, 1990年代後半以降に, 専門学校進学者は大学進学層と近い層になっていることを明らかにしている。

日下田・矢野(2013)は, 女子高校生のライフ展望という観点から, 進路選択の差異とその合理性について分析をしている。矢野(2015)は男子の場合, 経済的ゆとりがあれば大学進学という傾向が見られ, 専門学校か専門学校かの選択について, 家庭環境(親の学歴と所得)と学習(本人の学業成績, 学校のトラック, 勉強時間)の影響はないが, 女子の場合は, 大学進学か, 短期進学(短大・専門学校)か, 就職かの選択において, 男子と異なり, 就職と短期進学の間にも, 短期進学と大学進学の間にも, 家庭環境と学習の壁があることを明らかにしている。リクルート・カレッジマネジメント(2014)では, 大学進学者・短期大学進学者, 専門学校進学者で, 志望校検討時の重視項目がどのように異なっているのかをまとめており, とくに, 短大進学者では「資格取得」「就職に有利」「校風

や雰囲気」「自宅通学」を重視する傾向を指摘している。以上で見てきたように、女子の進路選択行動をみる場合には、こうした複雑さを念頭に置かなければならないことがわかる。ただ、他方で、特定の分野・職業を念頭において、どのような進路選択が行われているのかという研究は行われていない。

他方、保育の分野では、こうした進路選択の違いや、学歴の差について、どのような研究がなされてきたのか。保育の質や専門性に関する議論は非常に関心も高く、何が保育の質なのか、それをどのように測定するのか、またどのように質を高めるのかについて、非常に多くの研究がなされている(秋田・佐川 2011, シラージ・キングストン・メルウィッシュ 2016)。その中心は保育実践の質に関する研究である。欧米では、子どもの過ごす環境等だけでなく、保育者の教育水準からの研究がおこなわれているが、日本において、筆者の管見の限り、こうした視点からの研究はそれほど多くない。

その中でもいくつかの実証研究がおこなわれてきた。たとえば、北野(2006)は保育現場の園長・主任に、四大卒保育士に対する潜在的需要をアンケート調査で探り、現場でも保育士養成の四年制化が必要であると認識していることを明らかにしている。大嶋ほか(2009)においても、保育士養成の年限について、四年制養成で行うべきという回答は、養成校よりも現場で多く見られていることが指摘されている。ただ、北海道の公立大学が四大化する際の議論において、保育者、高校、園長を対象としたアンケートやインタビューから、社会的要請を探った研究(三国ほか 2013)では、上位資格へのキャリアアップに意欲的な現場保育士は10.7%のみで、「どちらともいえない」との回答が65.5%であると、地位の差なのか、地域による差なのかは不明だが、異なる結果が出ている。高校教員のアンケートでは、進学の実績が広がる、就職後のキャリアアップにつながるなどの理由で、四大化を望む意見の方が多数の結果であった。園長へのインタビューで、四大卒採用の最大の課題は、給与体系をはじめとした待遇問題であること、ほとんどの園で、保育者の採用で四大卒と短大卒を区別していないが、比較するとほとんどの園で四大卒者を高く評価していることが明らかになっている。とくに、物事を論理的に考える力、書く・話すと言った能力、学ぶ姿勢の強さの点で優れていると回答している。

保育者養成という観点から、学歴と取得できる資格の関係を述べておくと、幼稚園については、幼稚園教

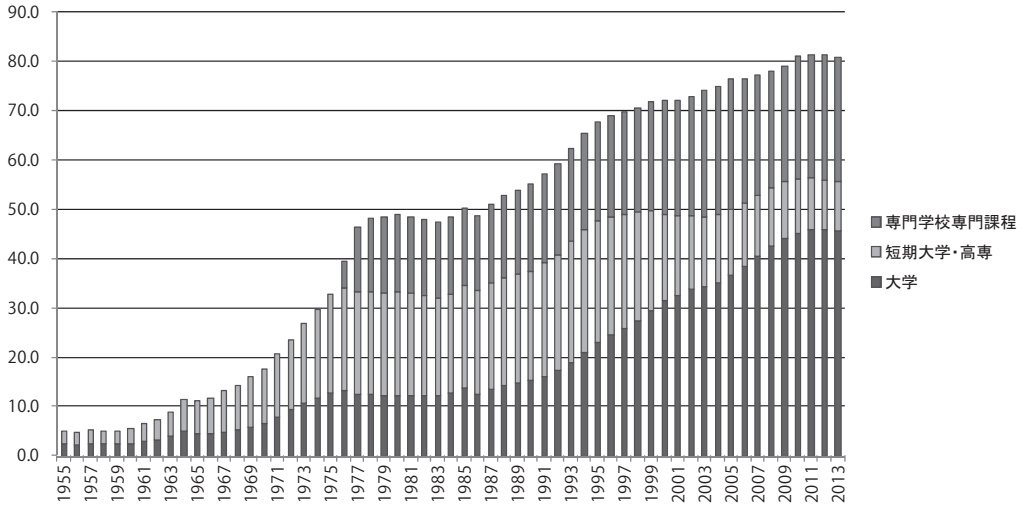
諭一種免許の資格は4年制大学で、幼稚園教諭二種免許の資格は短大・専門学校で取得できるという段階の違いがあるが、保育士資格については、2年であっても4年であっても取得できる資格は同じである。少子化対策として子育て支援政策の充実が課題となる中、養成校に対しても、より専門性の高い保育士の養成に対する要求はあり、それに対するカリキュラムの改訂なども行われているが、二年制の短大での養成を前提としているため、もともと過密な短大での養成カリキュラムがそれ以上過密にならないようしており、無理を来しているとの指摘もある(三国ほか 2013)。また、全国の指定保育士養成施設のシラバスを分析した北野(2009)は、四年制大学では、多数の資格が取得可能だが、必ずしも保育に特化されておらず、教育や子育て支援の機能に関する内容が必ずしも十分ではなく、今後はさらに保育に専門特化すべきであると指摘している。

四大卒と短大卒の違いは限られた事例研究しか行われておらず、今後のより包括的な研究が必要だが、以上の先行研究の結果をまとめると以下のような状況であると考えられる。すなわち、保育資格などに係る保育政策の影響もあり、保育者養成機関である四年制大学が短期大学よりも保育に専門特化した内容を教育しているわけではないが(北野 2009)、北海道の事例では四年卒者の評価が高く(三国ほか 2013)、園長や主任は四大卒者への潜在需要は大きいと考えているが(北野 2006)、保育者自身は、必ずしも四年制化が望ましいとは考えていない(三国ほか 2013)。現在の保育資格などの政策、制度のあり方に対して、またカリキュラムのあり方に関しては多くの議論をされているが(たとえば、日本保育学会 2016)、個別大学で、どのような考え方で、養成期間の延長をカリキュラム上の特徴につなげているのかについても、実践としては行われているが、それを研究対象として論じたものは多くないなど、本稿の関心に直接こたえる研究はそれほど多くはないことが明らかになった。

2.2 分析課題とデータ

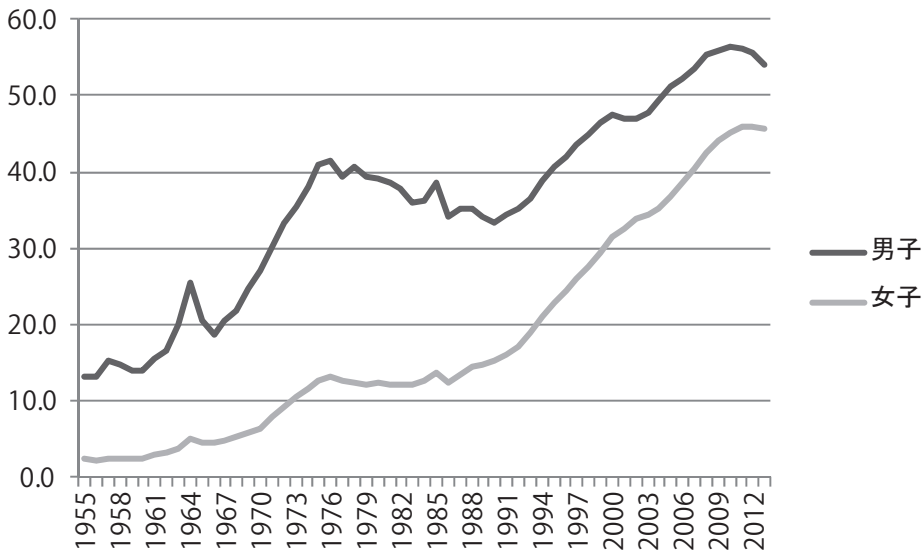
以上、2つの観点から先行研究のレビューを行ってきたが、保育者養成の高学歴化はどういう背景で進んできたのか。高校生がどのような観点で進路を選択した結果として、四大化が進んできたのかは十分に明らかにされていない。保育者を将来就きたい職業として考える高校生にとって、四年制大学と短期大学、専門学校をどのように選択しているのか。保育士資格を取

図表 3 女子の高等教育への粗進学率



(注) 広島大学高等教育研究開発センターのデータベースより筆者作成。図表 4 も同様。

図表 4 粗進学率の男女差



るには、もっともオーソドックスな方法は、厚生労働省が指定する保育士養成校を卒業することであるが、それ以外の道がないわけでもない。つまり、保育士試験を受験する方法もあり、合格率は2割程度だが必ずしも養成校に入学しなくても保育者になる道はある。こうした仕組みの中で、彼らがどのように進路選択をしているのかを具体的に明らかにするのが本稿の課題

である。

以上の課題を明らかにするために用いたのは、東京大学大学経営・政策研究センターが2005年11月に実施した「高校生の進路についての調査」である。全国の高校3年生4000名(男子2000名、女子2000名)とその保護者4000名が回答したが¹⁾、このうち、「30代でつきたい職業(複数回答)」で「幼稚園の先生や保育

士」を選んだ高校生658名(16.5%)を分析対象とした。複数選択であるので、必ず保育者になりたいものもいれば、なんとなく、そうした選択肢も考慮に入れているものも両方含まれている。なお、約10年前の調査で少し古いですが、この10年ほどで、進路選択の基準が大きく変わったとは考えられないので、大きな問題はないと考えている。

分析に入る前に、保育者を将来の希望として考えている高校生658名は、そうではない高校生に比べてどのような特徴があるのかを確認しておく(図表5)。仕事を選ぶときの条件として重要なものについて、保育者希望の者とそうでない高校生でどのような違いがあるのか。違いがみられたのは、3項目で、保育者を希望する高校生ほど、「人の役に立つ」「自分の生活を楽しめる」ことを重視し、「独立して自分で自由にできる」ことは重視しないことがわかる。保育士の処遇については現在、大きな社会問題となっているが、収入に関する条件については特に差が見られなかった。

3. 分析結果

3.1 男女別の傾向

「30代でつきたい職業」で保育者を選んだ658名のうち、男子199名、女子459名であった。現在の保育者の男女割合と比べるまでもなく、意外に男子で保育者を将来の職業として考えるものが多いことが分かった。彼らの第一希望の進路をみたのが、図表6である。男子の場合、第一希望の進路で最も多いのは80.6%、次いで専門学校12.9%となっており、大半のものが大学進学を希望している。それに対して、女子の場合は、四大希望46.2%、短大希望32.4%、専門学校希望19.5%と、進路希望がわかれている。

また、図表7には、四大、短大を考えたことがある

もの(高校1~2年生の頃の希望で複数回答)に限定したうえで、受験予定の分野を選んだものである。保育者を将来の職業として希望しているので、男子も女子も教育・保育分野を選んだものが最も多い。ただ、女子の場合でも57.5%、男子の場合は34.8%である。漠然と将来の職業の選択肢の1つとして保育者を考えているが、強く希望しているものは、それぞれこの程度の割合ととらえるのが現実的であろう。受験予定なので複数回答になっているが、男子の場合は、社会系、人文系、工学系の順に他の分野を受験する予定だが、女子の場合、人文系、社会系、看護・医療技術・福祉系も併願対象となっているようである。このようになっている背景には、高校3年生の時点で、自分が何に向いているのかわからない高校生が多いことは影響している。図表8には、「自分が何に向いているかわからない」と回答した割合を男女別に示した。男子の方がそう感じている生徒の割合が多い。なお、高校生4000名全体の回答でも、「強くそう思う」11.8%、「そう思う」41.1%、「そうは思わない」37.2%、「全くそうは思わない」9.9%であり、統計的な検定をしても、保育者を目指す高校生がとくに、そういう傾向があるわけではなく、これは高校生全体の傾向として言うことである点には留意すべきである。自分が何に向いているのかわからないという傾向は、30代で他につきたい職業の回答状況をみてもよく理解できる。図表9には、保育者以外に、30代でどのような職業についていたいと回答しているのか、上位5つの職業を男女別に示した。詳しくは説明しないが、ここで挙げられた職業をみると、高校生の時点でイメージしやすい職業がかなり限定されていることや、その中で何が自分に向いていて、目指したいのかわからないという様子がよく伝わっている。

このように、必ずしも保育者を第一希望の職業とし

図表5 仕事を選ぶときの条件として重要なもの

	保育者希望	その他高校生	
自分の生活が楽しめる	65.0	58.9	*
人の役に立つ	64.7	47.1	***
失業の恐れがない	44.7	41.5	
専門知識や技能が生かせる	43.3	42.2	
高い収入が得られる	33.7	36.8	
独立して自分で自由にできる	13.8	16.7	***
責任者として指揮が取れる	9.6	9.9	

(注)四件法で「とても重視した」の割合。***は1%水準で有意、*は10%水準で有意。

で考えている層ばかりではないものの、保育者を将来の仕事として希望する者のうち、約 3 割が男子学生で、彼らの四歳志向が強いこと、また、女子についても、第一希望の進路の割合をみれば、四大が最も人気があること、こうした背景で、この分野の四大化が進んでいる可能性が 1 つ示される。

3.2 女子の進路希望を分ける要因

女子では、第一希望の進路について、四大、短大、専門学校への希望はわかれていた。どのような要因で、第一希望の進路が分かれているのかをここでは検討したい²⁾。まずは、図表10に、第一希望の進路と受験予定の進路の関係を示した。当然のことながら、第一希望の進路については、どの生徒も受験予定であるが、それ以外の重なり具合については若干傾向が異なる。

私立にせよ、国立にせよ、四大を第一希望に考える生徒は、短大や専門学校を受験する学生は非常に少ないが、短大を第一希望でも四大を受験するものは 2 割くらい、専門学校を受験するものは 1 割強である。専門学校が第一希望でも、大学や短大を受験するものも 1 割くらいいる。選抜性の関係や受験科目、推薦入試などの関係で、このような併願状況になっていると考えられる。

では、女子の第一希望の進路を分ける要因は何かを、多項ロジスティック回帰分析によって明らかにする。独立変数には、先行研究で、女子の進路選択の規定要因として、家庭環境（ここでは、家計年収）や学習（ここでは中 3 の成績）(矢野 2015)、親の考え方(藤村 2011、ここでは女子には高学歴は不要)、地域変数(朴澤 2016、ここでは近くに適当な進学先があるかを

図表 6 第一希望の進路 (%)

	四大	短大	専門学校	その他・未定	合計
男子	80.6	2.9	12.9	3.5	100
女子	46.2	32.4	19.5	1.9	100

図表 7 受験予定の分野（四大・短大を志望したもののみ）

	教育・保育	人文	社会	看護・医療 技術・福祉	家政・生活科 学・栄養	工学
男子	34.8%	24.1%	32.6%	10.6%	1.4%	19.1%
女子	57.5%	23.8%	13.5%	13.2%	10.3%	1.2%
全体	50.8%	23.9%	19.1%	12.4%	7.7%	6.4%

図表 8 「自分が何に向いているかわからない」に対する回答 (%)

	強くそう 思う	そう思う	そうは思 わない	全くそうは思わ ない
男子	18.1	48.2	26.6	7.0
女子	9.4	36.6	42.5	11.5

図表 9 「30代で他に付きたい職業（多い順）」

	男子	女子
1位	教員 57%	専業主婦 52%
2位	公務員 50%	教員 35%
3位	料理人 30%	福祉系 33%
4位	警察官等 29%	販売接客 30%
5位	スポーツ選手 29%	公務員 26% 一般事務 26%

考慮)などの影響が確認されているので、そうした変数については当然投入した。また、3.1で、「自分に何が向いているかわからない」生徒の多さが確認できたことから「進学すればやりたいことが見つかると思う」「つきたい職業に直結している」「職業に必要な資格が取りたい」などの項目についても、投入した。結果は図表11のとおりであり、結果の概要を図表12に示した。

本人の学力(中3成績)については、成績がよい場合に、大学進学を希望する傾向が明確に確認された。家計年収については、低い場合に専門学校を選ぶ傾向がみられた。女子には高学歴が不要という考え方を持つ場合には、四大ではなく、短大、専門学校を選択している。大学を選ぶ際に特徴的なのは、「進学すればやりたいことが見つかると思う」という意識であった。短大を選ぶ場合に特徴的なのが、「つきたい職業と進路が直結」「資格を取りたい(本人も親も)」であった。他方、専門学校を選ぶ際に特徴的なのは、「実践

的知識を学びたい」という意識であった。

こうした諸要因によって、保育者を希望する女子の進路希望が分かれていることが明らかになったが、本稿の問題関心である、どのような背景で保育者養成の高学歴化が進んでいるのかという問いに照らして考えてみると、進学した後で、やりたいことを見つけないという生徒の多さが影響を与えている可能性が大きいと考えられる。

4. 結論と今後の課題

本研究で明らかになったことを簡単にまとめておきたい。保育者養成における近年の高学歴化の背景を高校生の進路選択という観点から検討してきた。第一には、男子の潜在需要の影響が考えられる。実際に保育者を強く希望している層は多くはないが、将来の職業として興味を持つ生徒は想像以上に多かった。彼らの大学進学志向の高さが一つの影響として考えられる。

図表10 第一希望の進路と受験予定の進路(女子のみ)

		受験予定			
		四大・私立	四大・国公立	短大	専門学校
第一希望の進路	四大・私立	100.0%	2.4%	16.5%	9.4%
	四大・国公立	69.8%	100.0%	20.6%	9.5%
	短大	3.8%	2.3%	100.0%	11.3%
	専門学校	2.5%		11.3%	100.0%

図表11 女子の進路希望を分ける要因(多項ロジスティック回帰分析の結果)

	短大			専門学校		
	B	有意確率	Exp(B)	B	有意確率	Exp(B)
切片	2.584	0.024		0.548	0.656	
中3成績	-0.553	0.000	1.738	-0.728	0.000	2.071
女子に高学歴は不要	0.576	0.010	0.562	0.799	0.001	0.450
近くに適当な進学先があるかを考慮	-0.054	0.722	1.055	-0.085	0.614	1.088
自分の成績にあっている	-0.102	0.614	1.107	-0.478	0.030	1.612
つきたい職業に直結している	0.842	0.012	0.431	0.301	0.362	0.740
実践的な知識が学べる	0.243	0.468	0.784	0.666	0.063	0.514
職業に必要な資格を取りたい	0.575	0.039	0.563	0.196	0.479	0.822
進学すればやりたいことが見つかると思う	-0.359	0.037	1.432	-0.463	0.016	1.588
家計年収	-0.001	0.123	0.999	-0.001	0.015	0.999
(保護者)資格や免許を取れる学校を希望	0.537	0.015	0.584	0.257	0.291	0.773
モデル適合度	P=0.000					
Cox と Snell のR2乗	0.313					
NagelkerkeのR2乗	0.356					

参照カテゴリーは四大

図表12 結果の概要

	希望進路		
	四大	短大	専門学校
成績がよい	○		
家計年収が低い			○
女子学歴不要論		○	○
進学してやりたいことを見つけたい	○		
つきたい職業と進路が直結		○	
資格とりたい(親もそれを希望)		○	
実践的知識を学びたい			○

第二は、やりたいことがまだはっきりしない層が増えていることの影響が大きいのではないかとこの点である。短大や専門学校を選んだ場合は、保育者以外の選択肢がきわめて狭められてしまうが、そこまでの強い志望が確立しているわけではない生徒が多く、四大で入学してから、やりたいことを考えたいという希望につながっているのではないだろうか。ただし、これは本人の成熟度の問題だけでなく、社会構造の変化の影響も大きいと考えられる。

保育者養成の高学歴化、つまり養成期間を延ばすことがどのような影響を与えているのかについても解明すべき点は多々残されている。保育者養成の四年制大学は増えたが、そこに進学した高校生のうち、どのくらいが実際に保育者になっているのか。その際に保育者を選んでいく理由とそれ以外を選んでいく理由は何か。また、2年という養成期間の延長をどのようにカリキュラム上の強みと特徴に生かしているのかについて、大学によって差があるのか。実際の保育現場で、こうした学歴の違いは、保育者としての成長、保育士としての資質向上にどのように影響を与えているのか等、様々な観点について、実証研究を重ねる必要がある。

注

- 1) 調査の概要については、<http://ump.p.u-tokyo.ac.jp/crump/cat77/cat81/>を参照されたい。
- 2) 女子の進路選択では、将来の結婚と仕事継続のあり方を考慮することが重要であると先行研究でたびたび指摘されている。しかし、保育者を希望する女子に限定して確認したところ、希望する進路によって、「結婚しても仕事を続けたい」という意識に統計的に違いがみられなかったため、ここではその変数は考慮しなかった。

	結婚しても仕事を続けたい				合計
	強くそう思う	そう思う	そうは思わない	全くそうは思わない	
4大・私立	26.8	48.8	23.6	0.8	100.0
4大・国公立	33.3	47.6	15.9	3.2	100.0
短大	31.6	48.1	20.3		100.0
専門学校	36.3	51.3	10.0	2.5	100.0
合計	31.3	48.9	18.6	1.2	100.0

参考文献

秋田喜代美・佐川早季子 2011 「保育の質に関する縦断研究の展望」『東京大学大学院教育学研究科紀要』第51巻、217-234頁

イラム・シラージ、デニス・キングストーン、エドワード・メルウィッシュ (秋田喜代美、淀川裕美訳) 2016 『「保育プロセスの質」評価スケール』明石出版

大嶋恭二・石井哲夫・柴崎正行・大場幸夫・高野陽・小沼肇・西村重稀・金子恵美・増田まゆみ 2009 『保育サービスの質に関する調査研究』平成18・19・20年度厚生労働科学研究費補助金(政策科学総合研究事業) 報告書

北野幸子 2006 『ケア・教育・子育て支援を担う保育士養成システムの現状調査と四年制モデル養成システムの検討』平成18年度厚生労働科学研究費補助金(政策推進研究事業) 総括研究報告書

北野幸子 2009 「ケア・教育・子育て支援を担う保育士養成の実態と課題」『社会福祉学』第50巻第1号、123-133頁

長尾由希子 2008 「専修学校の位置づけと進学者層の変化—中等後教育機関から高等教育機関へ」『教育社会学研究』第83集、85-106頁

日本保育学会編 2016 『保育学講座4 保育者を生きる 専門性と養成』東京大学出版会

濱中淳子 2013 『検証・学歴の効用』勁草書房

藤村正司 2011 「なぜ女子の大学進学率は低いのか—愛情とお金の間」『大学論集』第43集、99-115頁

朴澤泰男 2016 『高等教育機会の地域格差—地域における高校生の大学進学行動』東信堂

三国和子・今野道裕・中島常安・糸田尚史・宮内俊一・傳馬淳一郎・鹿嶋桃子 2013 「北海道における公立保育系4年制大学の存在意義：北海道における保育の質向上と保育者養成」『名寄市立大学 道北地域研究所年報』第31号、125-149頁

リクルートカレッジマネジメント (短期大学マーケット研究班：小

林浩・能地泰代, 松本恵, 鈴木規子) 2014 「高校生・保護者から見た短期大学」『リクルートカレッジマネジメント』186号, 18-23頁

矢野眞和 2015 『大学の条件－大衆化と市場化の経済分析』東京大学出版会

※本研究は、東京大学大学院教育学研究科附属 発達保育実践政策学センターの関連SEED研究プロジェクトによる成果である。